The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	持ち込み・参照可の読解力測定試験における内容的妥当性
Author(s)	矢元, 貴美
Citation	外国語教育のフロンティア. 2021, 4, p. 263-274
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79377
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

持ち込み・参照可の読解力測定試験における内容的妥当性

Content Validity of an Open-Book Reading Test

矢元　貴美

Abstract

This article aims to verify the validity of the content of an open-book reading test. It is important to strengthen the validation of the content of tests by checking the achievement of learners in order for both learners and teachers to utilize the results of tests for future learning and teaching strategies. However, there are very few studies related to open-book tests that measure the second language ability, specifically reading ability of learners. This article verified the content validity of an online open-book Filipino reading test based on the following: (1) test items, (2) comments of examiners, and (3) examiners' scores. Since multiple kinds of test items were combined and the test items were based on the criteria and the scales of evaluation, as well as the content of each lesson, the content validity was identified. All examinees who are senior college students and who were considered to have higher reading ability than junior college students, achieved high scores. Only a few senior students found the test difficult, while many of the junior students found difficulties in the test especially in understanding the sentences in multiple-choice questions. It was clear from these facts that the test items were appropriate to measure the reading ability of learners. Regarding tests on minor languages, although those who created the test themselves often need to evaluate and verify the contents of the tests and even though it remains to be subjective, the validity of the content of these tests needs to be further verified using qualitative and quantitative methods.

Keywords: Open-Book Exam, Validity, Evaluation, Reading

1. 本研究の背景と目的

本研究では、持ち込み可のフィリピン語読解力測定試験における内容的妥当性を検証することを目的とする。遠隔形式で実施した試験の項目および受験者の感想に着目するとともに、受験者の得点を前年度に対面形式で実施した試験と比較することによって検証する。一事例の検討ではあるが、語学の分野における持ち込み・参照可の試験問題に関する今後の議論につなげたい。

学習の評価は受講者にとって関心が高いものであり、成績評価に用いるのみならず、受講者の到達度を受講者や教授者が確認し、その後の学習や教育に役立たせるために重要な

ことである。評価には適切性が大切であり、評価の適切性には、評価結果の安定度を問う信頼性、評価したいものを実際に評価できているかを問う妥当性、実施にかかる時間的・経済的コストに関わる効率性、すべての学生に対して評価したい能力を評価できるかを問う公平性の4点が含まれる（中島　2018: 18-20）。

筆者が担当する授業では2020年度の前半、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策のため、平常時には対面で実施している期末試験を遠隔で実施する必要があった。客観テストの実施において、対面では不正行為を防ぎつつ一斉に実施することが可能である一方、遠隔では閲覧・検索・相談等の制御が困難で、持ち込み不可の試験を実施することは難しい（京都大学高等教育研究開発推進センター　2020，大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部　2020，東海国立大学機構　2020）。

遠隔での実施では、参照を不可としたとしても、それを確認することはできない。また、インターネットや電子ツールが利用できる現在では、それらをも活用した上での言語運用能力を身につけることも重要である。そこで、筆者の授業では、暗記型の問題を減らし、問題を資料参照やウェブ検索にも耐えられる、持ち込み・参照可の試験を実施することにした。一方、フィリピン語の講読を通してフィリピン語の読解力を身につけることが授業の学習目標として設定されているため、授業内で取り扱ったテキストに用いられている語彙や構文の知識や、それらを理解する力を身につけたかどうかを測る必要もあった。

一般的な持ち込み・参照可の試験問題の作成方法に関する資料はある（Centre for Teaching and Learning, The University of Newcastle ほか）ものの、読解力をはじめとする、第二言語の運用能力を測るための、適切性が保たれる持ち込み・参照可の試験を作成する方法が示された研究は管見の限り見当たらなかった。学問の性格上、語学の試験では持ち込み可の試験が少ないという調査結果もある（野口　2014: 174）。そのため、持ち込み・参照可の試験で、かつ、授業内容を理解し読解力を身につけたかどうかを判断するのに適切な試験問題であるかという点が不確かなまま作成した。ゆえに、実際に作成した試験問題が学習目標に沿っており、評価の規準に適したものであったのかを検証する必要があると考えた。

妥当性には、基準連関妥当性、内容的妥当性、構成概念妥当性の3点がある（Messick 1995）。妥当性を脅かすものとしては、内容、方法、構成概念などがある（マクナマラ 2004: 62）が、本稿では、測りたい領域を問題の内容が反映しているかどうかという内容的妥当性に限定して検討する。信頼性の検討には複数の数的基準を用いることができる一方、妥当性に関する数的基準はほとんどなく、評定をつける目的で実施される試験の場合、評価の規準や基準および授業内容に即した問題を作成することにより、妥当性を高めることができるとされている（前田・山森　2004: 5-6）。妥当性に関する数的基準はほとんどないとされているが、本稿では、平均値と中央値、得点分布は検討項目として用いることとする。

2. 調査対象と調査方法

調査対象とする授業およびその期末試験の概要と、比較対象とする前年度の授業およびその期末試験の概要を以下に述べる。

2.1 授業の概要

本研究では、大阪大学外国語学部にて2020年度に開講され、筆者が担当した「フィリピン語I」（フィリピン語購読）の春・夏学期（2020年4月から7月）の授業を調査対象とする。本授業を筆者が担当しているのは2019年度からである。春・夏学期と秋・冬学期に1つずつ半期科目として設定されており、フィリピン語専攻の3・4年次生が履修する専門教育科目の専攻語科目（演習）で選択科目である。2020年度の春・夏学期は、新型コロナウイルス感染症対策のため、テレビ会議システムを用いた同時双方向型遠隔授業で実施した。

本授業では、中級フィリピン語を習得した受講者を対象とし、フィリピン語のテキスト講読と、取り扱ったテキストの内容に関連するテーマでの発表をおこなった。講読に関わる授業目的は、昔話や童話、初等中等教育で用いられている教科書の講読を通してフィリピン語の読解力を身につけることであり、学習目標は、専門用語も含まれる長文の内容を、辞書を多用しなくても理解できることである。

授業では3つのテキストを講読した。講読は第2回から開始し、第2回から第5回は1つ目のテキスト、第6回から第8回は2つ目のテキスト、第9回から第10回と第13回には3つ目のテキストを講読した。その上で、第14回に期末試験を実施し、第15回に期末試験の確認と解説をおこなった。表1は各回の授業内容をまとめたものである。

表1　各回の授業内容

授業回	授業内容
第1回	オリエンテーション
第2回	講読テキスト1 (1)
第3回	講読テキスト1 (2)
第4回	講読テキスト1 (3)
第5回	講読テキスト1 (4)
第6回	講読テキスト2 (1)
第7回	講読テキスト2 (2)
第8回	講読テキスト2 (3)
第9回	講読テキスト3 (1)
第10回	講読テキスト3 (2)
第11回	発表
第12回	発表
第13回	講読テキスト3 (3)・発表
第14回	期末試験
第15回	期末試験の確認と解説

受講者は3年次生9名、4年次生4名の計13名であった。2020年度の春・夏学期に在学していたフィリピン語専攻の3年次生は9名、4年次生は19名であり、3年次生は全員が受講していたことになる。4年次生4名のうち、2019年度にもフィリピン語Iを通年受講した学生は2名、半期受講した学生は2名であった。出席状況は良好であり、1回欠席または公欠した受講者が5名いたものの、2回以上欠席した受講者はいなかった。

成績評価は形成的評価と総括的評価を組み合わせ、授業への参加度20％、発表40％、期末試験40％で評価した。参加度は、講読テキストの予習をしてから授業に臨んでいるか、音読・解説を自発的に行っているか、他の受講者の発表に関する討論・検討に積極的に参加しているかなどの観点から評価し、発表は、口頭発表の手順や形式に従って行っているかなどの観点から評価し、ピア評価も取り入れている。

講読した3つのテキストは筆者が選択したものである。1つ目のテキスト「私たちの文化の保護（Pangangalaga sa Ating Kultura）」と2つ目のテキスト「自文化に対する誇りと支援（Pagmamalaki at Pagtangkilik sa Sariling Kultura）」は1990年に出版された小学校4年生向け社会科教科書、3つ目のテキスト「稲の伝説（Alamat ng Palay）」は2000年に出版された伝説集にそれぞれ掲載されている。

受講者は、予習、授業での理解、復習を通して講読テキストの理解を深める。受講者には事前に配布されたテキストを予習し、新しく知る語彙を辞書やインターネットを用いて調べることや、構文が理解できるかを確認することが求められる。日本語に翻訳しておくことまでは求められないが、授業内で文の内容を日本語で説明する必要があるため、翻訳にも取り組んでいる受講者もいた。

授業中には順に音読し、一文ずつ、または区切りが良い部分ごとに文の内容を日本語で説明していく活動をおこなった。難解な語彙や接辞に注意すべき語彙、複雑な構文を中心に、筆者が板書代わりのスライドを用いて画面上で解説するほか、受講者が難しいと感じる語彙の接辞や語根、修飾関係の確認のために指名して説明を求めることもあった。板書代わりのスライドは各授業終了後、大学の学習管理システム（Learning Management System, LMS）であるCollaboration and Learning Environment（以下、CLE）上に掲載し、復習に利用できるようにした。

比較対象とするのは、2019年度に開講され、同じく筆者が担当した「フィリピン語I」（フィリピン語購読）の春・夏学期（2019年4月から7月）と秋・冬学期（2019年10月から2020年1月）の授業である。教室において対面授業で実施し、授業目的、学習目標、授業内における活動内容、講読の手順、成績評価の方法は2020年度と同様である。

2019年度の受講者は、春・夏学期には3年次生7名、4年次生2名の計9名、秋・冬学期には3年次生13名、4年次生3名の計16名であった。欠席回数は、春･夏学期では、3回（公欠を含む）が3名、2回が3名、1回が3名、秋・冬学期では、3回が2名、2回が7名、1回

が4名であった。

2019年度に講読したテキストも筆者が選択したものである。春・夏学期に講読した「虹の伝説（Alamat ng Bahaghari）」は2000年に出版された伝説集、「フィリピンの独立に向けた挑戦（Mga Hamon sa Kalayaan ng Pilipinas）」は1996年に出版された小学校4年生向け社会科教科書、「フィリピン人の行動、フィリピン人の思考（Asal-Pilipino, Utak-Pilipino）」は1999年に出版されたハイスクール[1)] 1年生向け国語科教科書に掲載されている。秋・冬学期に講読した「赤、白、黒（Sa Pula, Sa Puti, Sa Itim）」と「失礼します！（Tabi Po!）」は絵本『耳に手が届く？（Abot mo ba ang Tainga mo?）』より、「私たちの国の天然資源は大切だ（Ang mga Likas na Yaman ng Ating Bansa ay Mahalaga）」は1996年に出版された小学校4年生向け社会科教科書より選択した。

2. 2 期末試験の形式と内容

各学期に実施した期末試験の形式と内容は以下の通りである。

2020年度春・夏学期の期末試験は授業と同様、遠隔にて実施した。試験問題はPDFファイルにて、解答用紙はWordファイルとPDFファイル両方でCLE上に掲載しておき、開始時間になると閲覧やダウンロードができるように設定した。解答はWordに打ち込んで提出するか、手書きのものをPDFまたは画像ファイルで提出するかのどちらかを選択できるようにした。受講者が解答している間も、不測の事態や質問に対応できるよう、テレビ会議システムで筆者と受講者とをつないだ状態にし、60分間の解答時間経過後、各受講者は解答をCLE上に提出した。予習や授業のために作成したノートやメモ、授業中に提示しCLE上に掲載してある板書スライド、ウェブ上の資料や辞書、紙媒体の辞書や教材など、何を参照してもよいという条件で実施した。

受講者には期末試験の前週に、上記の実施方法とおおよその出題内容および形式、持ち込み・参照可という条件も説明した。持ち込み・参照可ではあるものの、試験中に調べる時間的余裕はあまりないと思われること、持ち込み・参照不可の試験に臨むのと同様、充分に復習しておくことなどを連絡しておいた。

試験項目と配点は以下の通りである。3つのテキストそれぞれについて大問を設定し、大問1には、多肢複数選択を1、真偽判定を6、短答を3、日本語訳を2、それぞれ設定した。大問2には、多肢複数選択を2、真偽判定を5、多肢単一選択を2、空所補充を1、説明を1、日本語訳を1、それぞれ設定した。大問3には、真偽判定を6、短答を3、多肢単一選択を2、説明を1、日本語訳を2、それぞれ設定した。表2は大問ごとの試験項目と項目数、配点をまとめたものである。配点は、日本語で説明する問では3点、文を日本語に訳す問では、文の長さや構文の複雑さに応じて2点から3点、その他の問は2点で、満点は80点であった。

表２　2020年度の春・夏学期末試験における試験項目と配点

大問	試験項目	項目数	配点
1	多肢複数選択（6文から適切な文をすべて選択する問）	1	2
	真偽判定（6文がそれぞれ本文の内容と合うか判断する問）	6	各2
	短答（文中の語句が指す具体的な句を文中から抜き出す問）	2	各2
	短答（提示された語の接辞と同じ働きをする接辞が用いられている語を文中から抜き出す問）	1	2
	日本語訳（文を日本語に訳す問）	2	2または3
2	多肢複数選択（6文から適切な文をすべて選択する問）	1	2
	多肢複数選択（6文から不適切な文をすべて選択する問）	1	2
	真偽判定（5文がそれぞれ本文の内容と合うか判断する問）	5	各2
	多肢単一選択（文中の語の意味と同じ意味で用いられている語を含む文を4文から1文選択する問）	2	各2
	空所補充（文中の1文を別の書き方に換えた場合の空欄に適切な語を入れる問）	1	2
	説明（文中の語句が意味することを日本語で説明する問）	1	3
	日本語訳（文を日本語に訳す問）	1	2
3	真偽判定（6文がそれぞれ本文の内容と合うか判断する問）	6	各2
	短答（文中の語が指す具体的な語句を文中から抜き出す問）	3	各2
	多肢単一選択（文中の語の意味と同じ意味で用いられている語を含む文を4文から1文選択する問）	1	2
	多肢単一選択（文中の語の接辞と同じ働きをしている接辞が用いられている語を選択する問）	1	2
	説明（登場人物の行動の理由を日本語で説明する問）	1	3
	日本語訳（文を日本語に訳す問）	2	2または3
			計80

2019年度の期末試験は各学期ともに対面形式にて紙媒体で実施した。2019年度の春・夏学期の期末試験では、3つのテキストそれぞれについて大問を設定し、大問1には、日本語訳（語彙の意味）を11、日本語訳（文の意味）を8、大問2には、選択空所補充（適切な接続詞の選択）を5、日本語訳（語彙の意味）を7、日本語訳（文の意味）を9、大問3には、日本語訳（語彙の意味）を5、日本語訳（文の意味）を11、それぞれ設定した。配点は、日本語訳（語彙の意味）と選択空所補充では各1点、日本語訳（文の意味）では、文の長さや構文の複雑さに応じて2点から4点で、満点は100点であった。

2019年度の秋・冬学期の期末試験では、3つのテキストそれぞれについて大問を設定し、大問1には、日本語訳（語彙の意味）を17、日本語訳（文の意味）を6、選択空所補充（適切な接続詞や副詞の選択）を6、短答（文中からの同義語または対義語の抜き出し）を3、設定した。大問2には、選択空所補充（適切な間投詞の選択）を5、短答（指定された語根に構文と文脈に合う適切な接辞をつけた動詞を答える問）を5、日本語訳（文の意味）

を7、大問3には、日本語訳（語彙の意味）を15、日本語訳（文の意味）を5、それぞれ設定した。配点は、日本語訳（語彙の意味）、選択、短答では各1点、日本語訳（文の意味）では、文の長さや構文の複雑さに応じて2点から4点で、満点は110点であった。

2019年度と2020年度の試験問題における大きな相違点は2点である。1点目は、2019年度の試験では持ち込みや参照は不可であったが、2020年度の試験では可であったことである。2点目は、2019年度の試験では語彙や文の意味を日本語で答える問が大半を占めていたが、2020年度の試験では試験項目が多様化したことである。持ち込み可の試験であることから、2019年度の試験のように、語彙や文の意味を問うといった画一的な問題構成では作成できないこともあり、複数の種類の問題で構成した。

3. 試験の内容的妥当性の検討

各試験項目の出題意図、受講者の得点、受講者の感想、の3点に着目し、持ち込みや参照を可とした2020年度春・夏学期の期末試験の内容的妥当性について分析を試みる。

3.1 各項目の出題意図

2020年度春・夏学期の期末試験における出題の意図は以下の通りである。読解力が身についたかどうかを測るために設定した試験項目は全体の約74％である。多肢複数選択で複数の文の中から適切または不適切な文をすべて選択する問、真偽判定で複数の文がそれぞれ本文の内容と合うかを判断する問、短答で文中の語句が指す具体的な句を文中から抜き出す問、多肢単一選択で文中の語の意味と同じ意味で用いられている語を含む文を複数の文から1文選択する問が該当する。

多肢複数選択で複数の文の中から適切または不適切な文をすべて選択する問、および、真偽判定で複数の文がそれぞれ本文の内容と合うかを判断する問では、本文中の語彙や構文、または、前年度までに学習した語彙や構文を理解できていれば読解できる文を選択肢に設定した。しかし、どちらの項目においても、設問中の語句や構文が本文中のものと全く同じになることは避け、内容の意味が理解できるかを判断できるように留意した。

短答で文中の語句が指す具体的な句を文中から抜き出す問は、指示代名詞を含む語句が指す内容が含まれる、その前後の文の内容を理解できているかを測るために設定した。多肢単一選択で文中の語の意味と同じ意味で用いられている語を含む文を複数の文から1文選択する問については、本文中の語彙や構文、または前年度までに学習した語彙や構文で選択肢の文を構成し、各文の内容とその文中での語の使われ方を理解できるかどうかを測った。

多肢選択式の問題では、学習内容を理解できていなくても偶然正解することがあり、理解を正しく測定するには不充分であると言われる（中島　2018: 62）。基本的な知識や技

能が身に付いているかどうかを測る必要もあるため、択一選択の問題も活用したが、受講者の理解をより正確に測定できるよう、正解数は示さず複数選択する問も多めに設定した。

その他の項目は、読解力以外を測るために設定した。短答のうち、提示された語の接辞と同じ働きをする接辞が用いられている語を文中から抜き出す問、空所補充（文中の1文を別の書き方に換えた場合の空欄に適切な語を入れる問）、多肢単一選択のうち、文中の語の接辞と同じ働きをしている接辞が用いられている語を選択する問は、講読に際して必要となる文法事項を授業中に説明していたことから、それらを理解しているかどうかを問うために設定した。

持ち込みや参照が不可の試験では読解力が身についたかどうかを測るために用いることができる、日本語訳（文を日本語に訳す問）および説明（文中の語句が意味することを日本語で説明する問）は、授業中に文の構文やテキストの内容を理解しようとしていたか、メモを取っていたか等、授業への参加度を確認するために設定した。

授業における評価の規準や基準、および授業内容に即した問題を作成できたことから、ある程度の内容的妥当性は認められると言える。また、問題の種類によってはメリットとデメリットがあるため、複数の種類の問題を組み合わせることで、より妥当性が高くなる（中島　2018: 64）と言われており、2020年度の試験問題は妥当性が高まったと考えられる。

3.2 受講者の得点

まず、期末試験における受講者の得点の平均値と中央値に着目する。平均値は、他の値と比較して極端に高い、または低い値がある場合に、その値の影響を大きく受けるため、影響を受けにくい中央値にも着目する。100点満点に換算した平均値は、2020年度の春・夏学期では66.4、2019年度の春・夏学期では62.6、秋・冬学期では73.0であった。中央値は2020年度の春・夏学期では67.5、2019年度の春・夏学期では71.0、秋・冬学期では80.0であった。2019年度の秋・冬学期の平均値、中央値がともに他の学期より高くなっているが、正解となる答の幅が広かったことや部分点を獲得できる問が多かったことが影響していると考えられる。

表3　各期末試験における平均値と中央値

試験	平均値	中央値
2019年度 春・夏学期	62.6	71.0
2019年度 秋・冬学期	73.0	80.0
2020年度 春・夏学期	66.4	67.5

次に得点分布に着目する。2020年度の春・夏学期では60点未満が4名（約30.8％）、60点台が4名（約30.8％）、70点台が2名（約15.4％）、80点台が2名（約15.4％）、90点以上が1名（約7.7％）である。2019年度の春・夏学期では60点未満が3名（約33.3％）、60点台が1名（約11.1％）、70点台が2名（約22.2％）、80点台が1名（約11.1％）、90点以上が2名（約22.2％）であった。2019年度の秋・冬学期では60点未満が3名（約18.8％）、60点台が3名（約18.8％）、70点台が1名（約6.3％）、80点台が7名（約43.8％）、90点以上が2名（約1.3％）であった。図1は3つの期末試験における得点分布を示したものである。受講者数が少ないことと、3年次生と4年次生の人数に差があることから、得点分布にばらつきはあるものの、極端な相違は見られない。

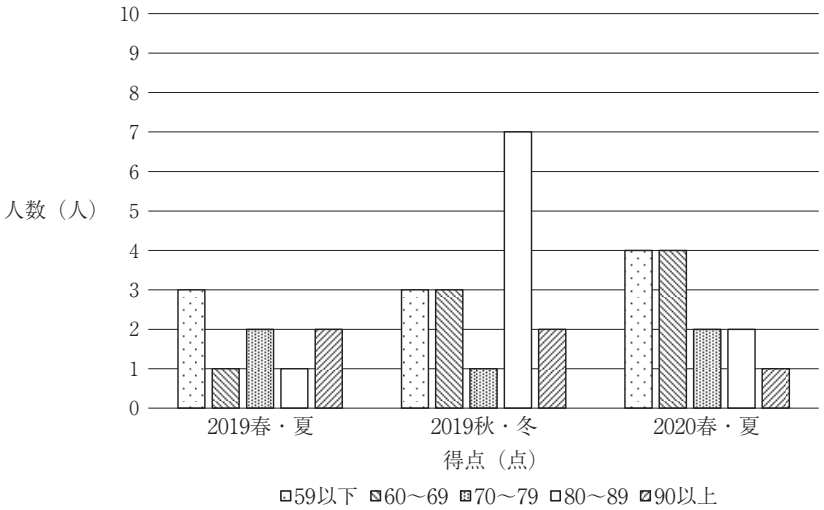

図1　各期末試験における得点分布

4年次生は3年次生より1年長く学習していることや、2020年度の春・夏学期に受講した4年次生は全員が前年度にも通年または半期受講していたことから、3年次生より高い読解力を身につけていると考えられる。4年次生の得点を見てみると、全員が70点台後半の得点であり、70点以上を得点した5名のうち4名が4年次生であった。このことから、読解力の高い受講者ほど高い点を得ることができ、試験問題はある程度妥当であったと考えられる。

3.3 試験後の受講者の感想

期末試験実施日および解答確認をおこなった、試験実施日の翌週の授業終了後にCLE上に提出された受講者の感想[2)]のうち、試験の形式や内容に関する回答に着目する。

試験問題が難しかったと回答した受講者は5名おり、そのうち4名は3年次生、1名が4

年次生であった。4年次生の1名は、ちょうど良い難易度だと回答した。具体的な回答は、「とても難しかった」、「選択肢のフィリピン語を訳していると時間がなくなった」、「選択肢までフィリピン語で理解する力はまだまだないと痛感した」、「問題の選択肢を読んでいると分からなくて何度も嫌になった」といったものである。読解力や文の内容理解を測るという選択問題の出題意図は適切に達成できていたと言える。また、難しいという回答が4年次生からは少ないことから、全体的な難易度は、読解力がより高い受講者には適切であったものと考えられる。

試験時間が足りなかった、または時間内に全て解答できたものの余裕がなかったと答えた受講者が8名おり、そのうち5名が3年次生、3名が4年次生であった。具体的には、「だいぶ時間がないように感じて焦った」、「問題数が多くて時間が足りなかった」、「もっと時間配分を考えればよかった」といった回答があった。比較的得点が高かった4年次生も時間的な余裕がなかったことから、もう少し適正に読解力を測るという目標を達成するには、問題数や時間設定を考慮する必要があると考えられる。

遠隔での実施についての不便さや問題点も挙げられた。具体的には、「パソコンの画面で問題と解答を扱うのが大変だった」、「解答用紙がダウンロードできなくて焦った」、「スクロールが大変だった」といった回答があった。問題が生じた際にはテレビ会議システムやメールを用いてすぐに連絡を取り、別のファイル形式での提出もできるように対応したため、大きな支障はなかった。しかし、読解力を測るための試験において、余計な緊張、機器の操作の不便さ、インターネット環境の不具合といった、読解能力の発揮を妨げる要因を排除するため、事前に練習する時間を取る、公正さが保てる範囲で受講者の機器や環境に応じて解答を入力するツールを複数準備しておく、といったことに配慮する必要があると考えられる。

4. おわりに

本稿では、持ち込みや参照可の読解力測定試験における内容的妥当性を、試験項目、受講者の得点、および受講者の感想に着目し検討した。実施した試験の数や受講者が少ないことから、妥当性を検討するには限界もあり、妥当性が高いとは明確に言い切れないものの、ある程度妥当であったと考えられる。

評価の規準や基準および授業内容に即した問題を作成し、妥当性を高めることは、成績評価のみならず、学習者が到達度を確認し、その後の学習に役立てるため、また、教授者が授業内容を改善するためにも重要である。内容的妥当性の評価をするのは「当該のテスト作成には直接関わらなかった人たちであるのが理想」（ヒューズ　2003: 29）とされる。より客観的に評価や検討をおこなうためには、作成者以外の視点で検討することや、複数の観点からの検証も必要である。

マイナー言語の場合、具体的な試験内容を評価することができる人材が少なく、作成者自身が評価や検討をおこなう必要もある。主観を排除しきれないという問題が残るが、数値に基づく量的分析や、受講者の内省や外省による質的分析を組み合わせ、客観的に検討していきたい。本稿で検討したのは内容的妥当性のみであったが、今後は他の観点からも総合的に妥当性を検討したいと考えている。

注

1) フィリピンでは2012年度から、中等教育はジュニアハイスクール4年間とシニアハイスクール2年間の計6年間となったが、このテキストが出版された当時の中等教育は4年間のハイスクールのみである。
2) 受講者が少ないことから、個人が特定されるのを防ぐため、回答の文言を一部修正している。

文献

Centre for Teaching and Learning, The University of Newcastle, Australia
2020 “A Guide for Academics: Open Book Exams” Retrieved from https://www.newcastle.edu.au/__data/assets/pdf_file/0006/268980/Open-Book-Exams.pdf（2020年10月30日アクセス）

Hughes, Arthur
2002 *Testing for Language Teachers (2nd edition)*, Cambridge University Press, Cambridge: UK.（ヒューズ、アーサー　静 哲人（訳）2003『英語のテストはこう作る』研究社、東京。）

京都大学高等教育研究開発推進センター
2020 「オンライン授業で、学習をどう評価するか？」Retrieved from https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/assessment.php（2020年10月30日アクセス）

前田　啓朗・山森　光陽（編著）、磯田　貴道・廣森　友人（著）、三浦　省五（監修）
2004 『英語教師のための教育データ分析入門――授業が変わる　テスト・評価・研究』大修館書店、東京。

McNamara, Tim
2000 *Oxford Introductions to Language Study: Language Testing*, Oxford University Press, Oxford: UK.（マクナマラ、ティム　伊東 祐郎･三枝 令子･島田 めぐみ･野口 裕之（監訳）2004『言語テスティング概論』スリーエーネットワーク、東京。）

Messick, Samuel
1995 Validity of Psychological Assessment: Validation of Inferences from Persons' Responses and Performances as Scientific Inquiry into Score Meaning. *American Psychologist*, 50(9), 741-749.

中島　英博（編著）
2018 『シリーズ大学の教授法4　学習評価』玉川大学出版部、東京。

野口　泰生
2014 「Faculty Development (FD) を考える――地理・環境専攻の取り組みと定期試験の『持ち込み』問題」『国士舘人文学』4、157-181。

大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部
2020 「オンラインで学習を評価するための10のポイント」Retrieved from https://www.tlsc.osaka-u.

ac.jp/project/onlinelecture/tips02.html（2020年10月30日アクセス）
東海国立大学機構 アカデミックセントラル インストラクショナルデザインチーム
2020 「オンライン授業で試験と成績評価を行うための教授法（ティップス）」Retrieved from https://office.ilas.nagoya-u.ac.jp/wp-content/uploads/2020/06/tips2.pdf（2020年10月30日アクセス）